

長崎の唐人屋敷

安野 眞 幸

一 自己紹介

ただ今ご紹介に預かりました安野眞幸と云います。弘前大学にもう十五年以上二十年近くもおります。学生たちには「弘前にいて長崎のことをやる」と何か駄じゃれのようなことを云って授業をやって来ております。なかなか旅行に行けないことなどから、私にとって長崎が段々と遠くなって参りまして、逆に地元の歴史の方に段々と関心が向かってきております。東北、中でも北東北には、中世には安藤氏という豪族が居りまして、あれは一体何だったのだろうかと云うことになります。安藤氏については、海であるとか流通であるとかを中心に領主権力ができて行くらしいと云うお話を聞いて参りますと、北東北の世界は沖縄であるとか東南アジアの世界と近いのではないかということになり、さらに海であるとか流通であるとかを考えて参りますと、それではイスラムの世界はどうであったのだろうか、などということにまで関心を広げているものでございます。

二 はじめに

今日これからお話することですが、実は「どうしよう、どうしよう」とおろおろ迷っております。どうお話すれば良いのか分からないでいるのです。実は最初頂いたテーマは「長崎の出島」に付いて述べよ、ということであったのですが、いろいろ考えまして「長崎の唐人屋敷」ということに変更させて頂きました。このテーマの問題について、お話の最後で一言云わせて頂きます。それが今日お話することの第一点です。

次に「都市長崎のプラン」について。これが今日お話する第二点目の問題です。実はこの問題は最近私が上梓しました『港市論』¹⁾の中で既に大部述べていることなのですが、時間のつぶし方もないので、時間を大分割かせてもらい、スライドの説明を交えながら、ここで述べさせて頂きます。最後に本日のテーマ「長崎の唐人屋敷」の問題についてチョッコと述べて行きたいと思えます。それでは早速、スライドをお願いします。

スライド1の地図を見ますと、ここに本日のテーマであります「唐人屋敷」があります。今回

のシンポジウムのテーマが「港の成立と形態」ということで、「形」について述べるということであります。とすると、「ここに唐人屋敷があります。ここが新地の唐人の荷物の蔵であります」と申し上げると、これで話は全部終りでありまして、これ以上何も付け加えることはないのではないかととなります。

「形態」の話はこれで全部おしまいとなると、「さあ、どうしよう」と云うこととなります。……それではということで、第二点目の問題に入っていくことに致します。

三 スライドの説明

1 長崎全体の地形

スライド1の地図を見ると、左上隅にオランダの黒船があり、小さな船がこの黒船を曳いてきている。その下にはいかにも中国船らしいものが見え、「唐船」と書いてある。今長崎の町の真中を流れている中島川が地図上では右から左に流れているので、河口の方の海は段々と土砂で埋まってくる。現在では「出島」も島ではなく、御存じのとおり、この辺り総てが埋め立てられて陸地になっている。逆に図の上方の海は深い海になっていて、埋め立てができず、現在でもこの図とほぼ同じ形が残っている。つまり、深いところに喫水の深いオランダの黒船が入ってきて、



スライド1

浅いところに唐船が入ってくるわけである。

長崎全体の地形についてだが、出島の右手にある「波止場」は現在も変わらず波止場となっているが、ここから遊覧船に乗って湾内に出て行き、後ろを振り返ると、町の後ろに大きな山がそびえているのが見える。この地図には載っていないが、きれいな三角形の山で、「金比羅山」、中世では「崇岳」と云う。それで今度は逆に、外洋から湾内に船で入ってくるときには、この高い山を目指して湾口からズーッと入ってくればよいことになる。

一方、湾の奥には海に突き出た小高い岬があり、長崎開港当時であれば、中島川に沿った「今魚の町」の辺りが漁師町であったと云われている。そこまでは浅瀬の干潟のようになっていて、浅い海に続いて、海とも陸ともつかない世界が広がっていたと思われる。つまり、この地図の描かれた江戸時代の段階では、海はここまでであったのだが、長崎開港当時はもっとずっと奥まで入り込んでいたに違いない。

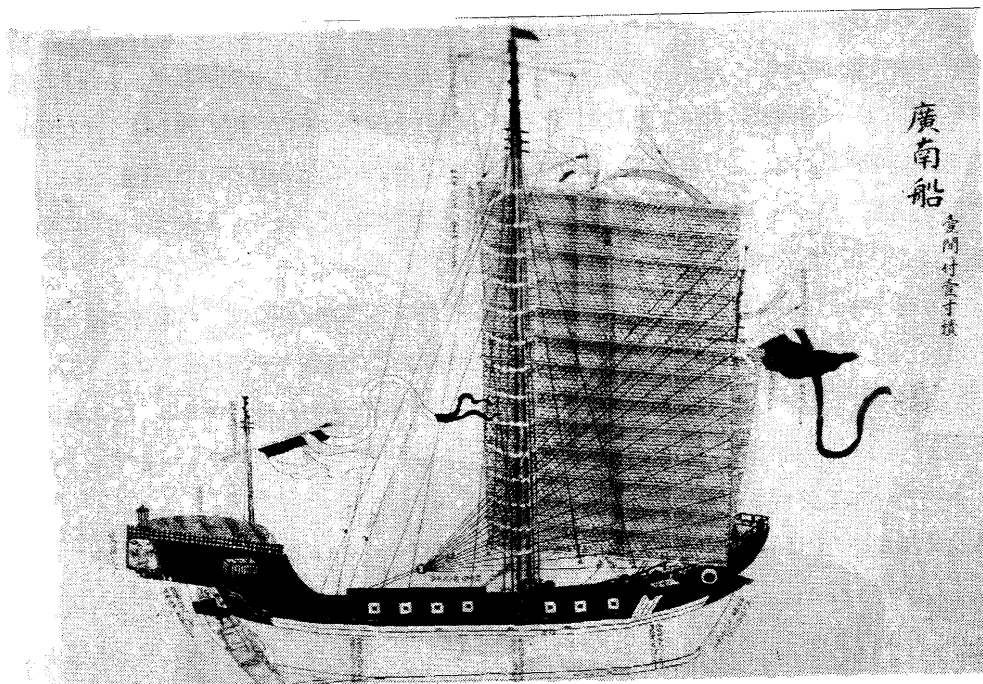
図の上方には「船津町」が見えるが、ここには立山からの小川が流れ込んでおり、小川の河口として、昔から船の着く「津」であったのではないか。それゆえ「船津町」と云う地名は古くまで遡ることができるのではないかと思われる。また奉行所「西屋敷」の地は海と陸との接点として風光明媚な場所で、昔は「森崎」と云って「恵比寿様」や「森崎権現」の社があった。またそこには「榎」の樹があり、市場になっていて、海幸・山幸を交換する場所であったとの記録がある。

今見ている地図は江戸時代にできたものだが、中島川の河口に「榎津町」と云う町がある。岬の先端の森崎の地がもともと榎の樹のある「津」だったのに、その「榎津」が後になって森崎の地からこちらに移ったものかどうかわからない。あるいはまた「榎津」という「津」がもともとここにあったのか、等々が考えられる。

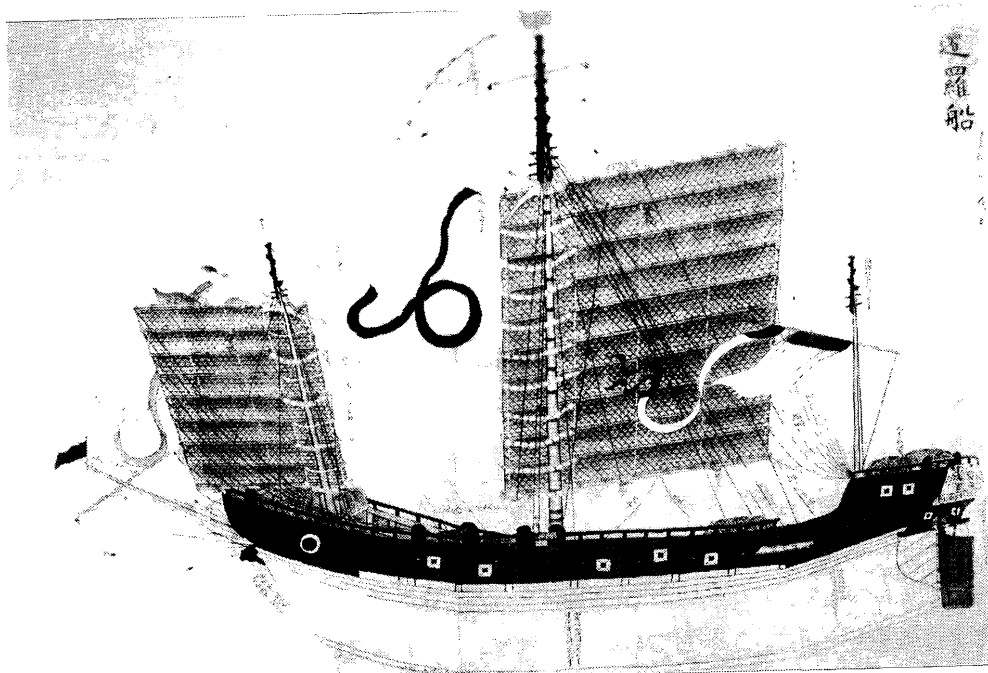
2 貿易船とハシケ

スライド2の絵は中国の方から来る船、スライド3は東南アジアの方から来る船で、どちらも中国船・唐船である。またスライド4は「長崎湾内唐船入津丸荷役之図」と説明があり、唐船からハシケに荷物を積換えている図で、当時荷物の積換えを「丸荷役」と云った。この図では、どういう荷物が来たか、禁制品はないかなどを役人が検査して荷物をいちいちチェックして「荷改帳」にノートしているところが描かれている。

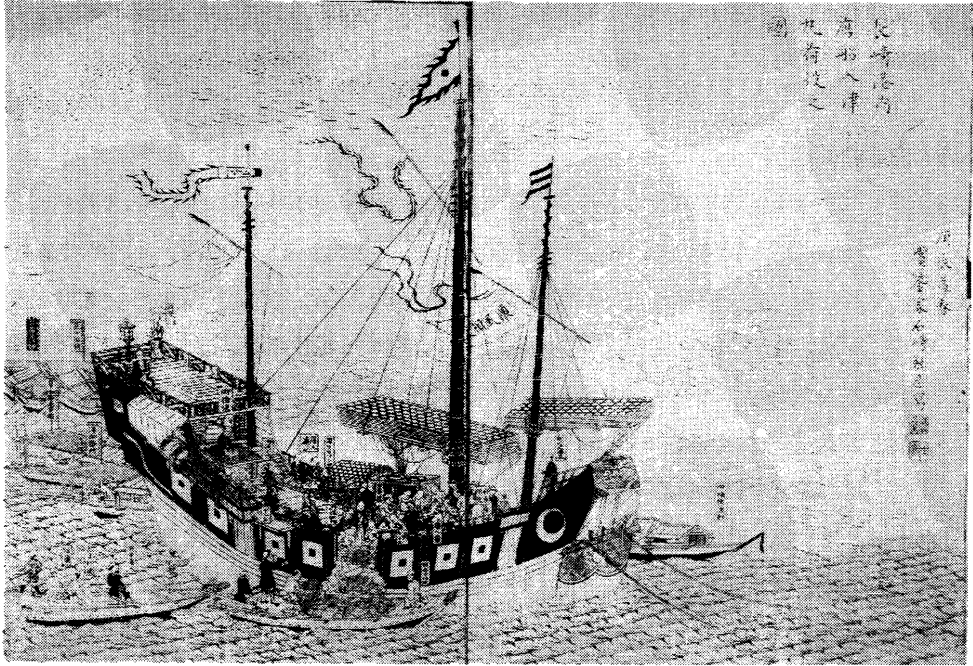
スライド5はオランダの黒船と出島の絵であるが、ここでも全く同じで、船からハシケに積換えてから陸揚げをしている。南蛮屏風によく描かれている南蛮船の場合もやはり同じである。つまり、外洋を航行して長崎にやってきた船は、直接岸壁に着かないで、必ず一旦小船に荷物を積換えてから陸揚げをしたわけである。それゆえ、長崎が港として存在するためには、小船・ハシ



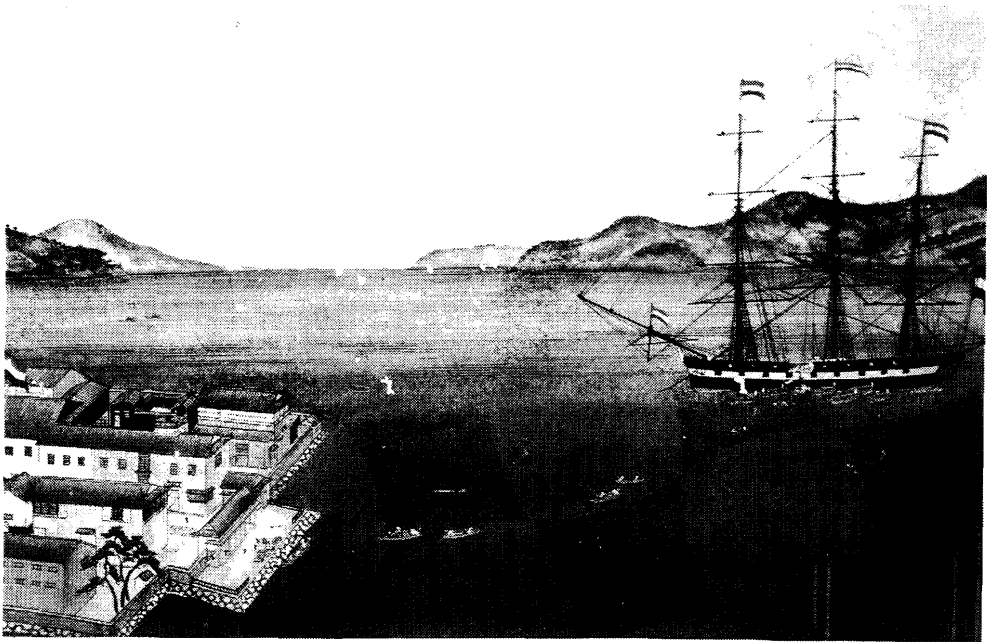
スライド 2



スライド 3



スライド 4



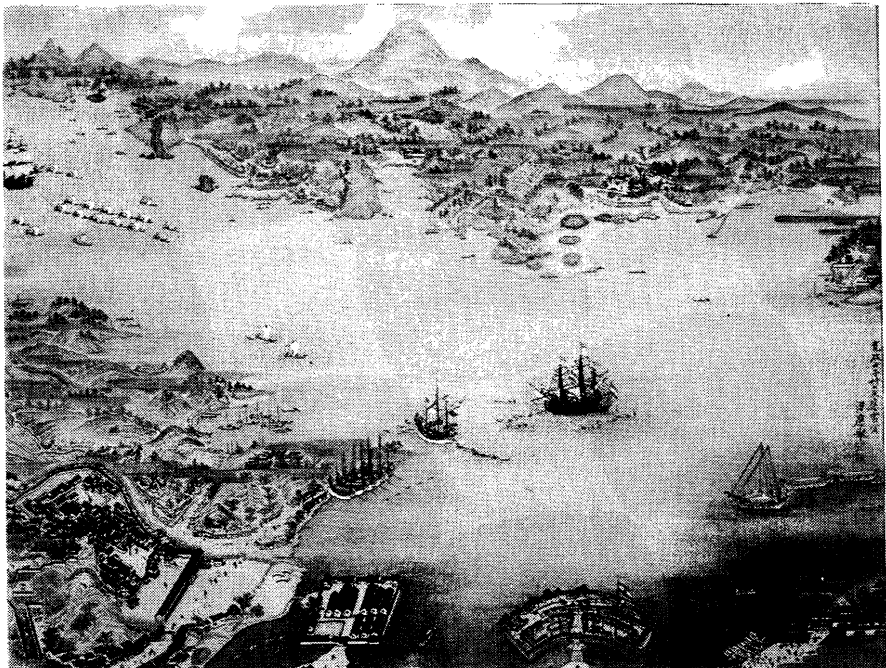
スライド 5

ケとか、丸荷役という仕事が最初から基本的にあったことになる。この仕事を港の中の誰が行うかが、港のあり方を考える上で大切なポイントとなってくると思われる。

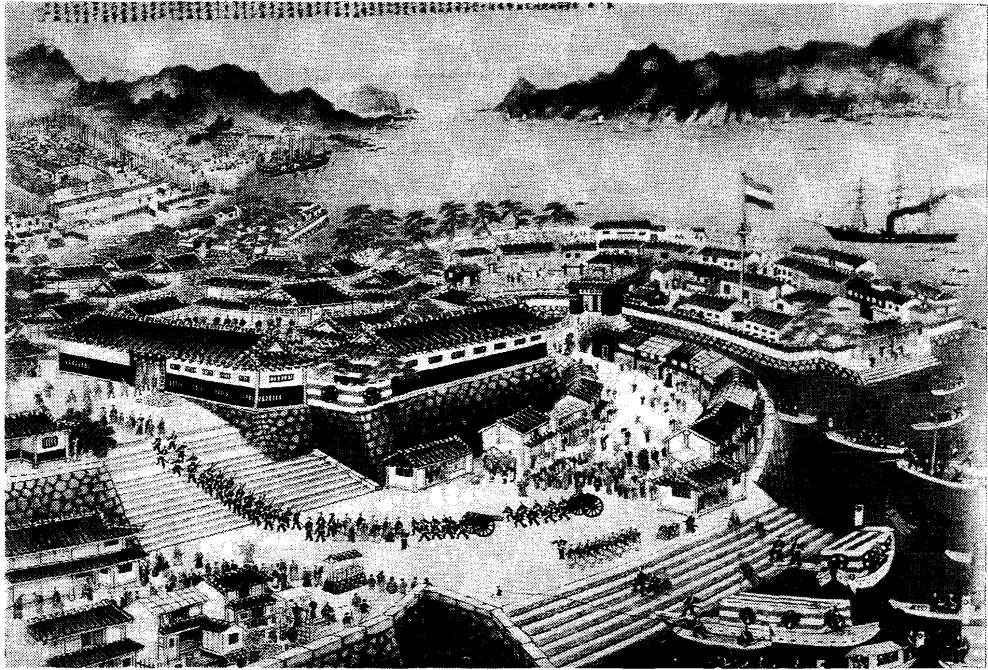
3 唐人屋敷の外観

次のスライド6は円山応挙の絵であるが、左上の方には黒船が小さい船に曳かれて湾内に段々と入ってくる様子が描かれている。左下の唐人屋敷には、「大門」と「二の門」と門が二つあり、二重に区切られ、柵や塀で囲まれている様子が良く描かれている。図の下、オランダの国旗が立っている「出島」もオランダ人を人々から隔離して収容する施設だが、こちらの方も同様に中国人たちを隔離して収容しているのである。オランダ貿易の方は、人も荷物も共に出島に収めるのだが、唐人貿易の方は、人は唐人屋敷へ・荷物は新地蔵所へと分かれている。

スライド7は、幕末の様子を描いたものだが、「唐人屋敷」のところがものものしく囲まれている様子が示されている。「出島」が収容所だと云われているが、こちらの方も隔離して収容する「収容所」だと思われる。この「唐人屋敷」は長崎の町の外側、十善寺郷という所にもともとあった幕府の薬園をつぶして、そこに元禄二年に建てられたもので、唐船五十隻分、来舶唐人五千人を一度に収容することができる施設であった。



スライド6



スライド7

4 波止場・広場・岬の教会・遊廓

町の問題を考える点ではスライド7の絵はよくできたものだと思う。波止場から西屋敷に至るところが広場になっている。よく南蛮屏風などにクジャクだとかオオムだとかその他いろいろな珍しい品物を広場にパーッと並べている絵があり、あの広場は市場だったのではないかと思われるが、それではこの長崎の中で、どこが市場だったのかとなると、この波止場の広場が市場としても使われていたのではないかと思われるのだが、よくわからない。実は日本では御承知のとおり、町のストリートが市場の代りをしているというのが通説なのだから、実際はどうだったのだろうかということになる。

スライド7の中央部分にあるのが西屋敷の奉行所で、奉行所だからその石垣は大層厳しい。現在でもこの石垣は残っていて、石段の部分は自動車道路になっている。奉行所の場所は現在は県庁になっている。昨日の高橋均先生のポルトガルの商館についてのお話で、ポルトガルはまず最初、砦を築いていくとあったが、この場所がポルトガルの商館・砦に当たる。私としては「岬の教会」と名付けているのだが、イエズス会の支配する「岬の教会」がポルトガルの商館を兼ねていたと考えている。

次のスライド8は江戸時代の初め、まだ唐人屋敷ができていないときのものである。できていないときでも唐船は来ている。ここで紹介している長崎の町の南の外れの辺りが「丸山町」とか



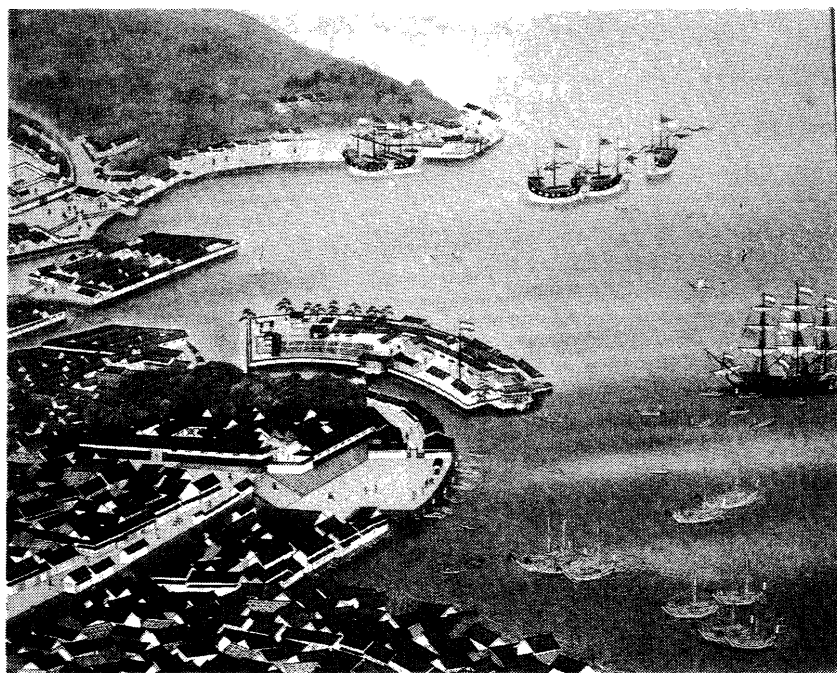
スライド8

「寄合町」という遊廓である。スライド9はスライド7とほぼ同じ絵だが、高台の一番西の端のところが「平戸町」であるが、こちらは片側だけの町になっていることがはっきりとわかる。平戸町のところの石垣は今でも残っている。

5 唐人屋敷の内部とその周辺

スライド10と11だが、この二つは共に唐人屋敷の内部を描いたものである。唐人屋敷の第一番目の門「大門」と第二番目の門「二の門」との間で、見ればわかるように、屋敷を出た「二の門」のところで「探番」と呼ばれるお役人がボディチェックをしている。唐人が外に出ていく際に一々ここで改められる。それを見ている役人もいる。「大門」と「二の門」との間のところに日本人が入ってきて、魚だとか野菜だとか薪だとか色んなものを商っている図である。

つまり日本人は最初の「大門」からこのの広場までは入れるし、唐人の生活に必要なものはこ



スライド9



スライド10



スライド11

ここで売買される。「二の門」より中に入れるのは遊女だけである。このようになっていて、遊女以外は入れない。このように厳しく管理されている。もう少し正確に言うと、日本人なら誰でもが「大門」のなかに入れたのかというと、必ずしもそうではなく、唐人屋敷乙名の発行した入門札を持った特定の商人だけしか入れなかったのである。またこの広場には唐通事などの役人も詰めていた。

唐船は一年に春・夏・秋の三シーズンにわたって日本にやってきたので、唐人屋敷の住人は次々に変わっていった。そこで、個々の唐人にとってみれば、日本に滞在する期間はそんなに長くはないということになる。しかしその期間中、「御寺」にお参りにゆくとか、御祭りであるとか何か特別なことがない限り、唐人はなかなか唐人屋敷の外に出られなかったわけで、だからこそ逆に御祭りであるとか、何か特別な行事を唐人の方がむしろ積極的にやろうとする気持もできてきたように思う。

山脇貞二先生の資料²⁾で、年号が違っているので比較の点で多少問題は残るが、1738年（元文三年）と1689年（元禄二年）のものであるが、入館した唐人の数が4,888人なのに対して、唐人屋敷に入った遊女の数が延べ人数として16,913人ということで、唐人の数の三倍強の遊女が唐人屋敷に入ったことになり、唐人たちにとってそんなことしかやりようがなかったのではないかと思われる。

次はスライド12であるが、唐船の入港する岸壁には本駕籠町・船大工町がある。駕籠は今のダンボールに当たり、荷物を梱包するための駕籠を作っていた町である。船大工町は船を作る大工さんのいた町で、船の修理が行われていたと思う。また「銅吹屋」があるが、ここで銅を洗練して輸出していた。



スライド12

四 都市長崎のプラン

スライド12の江戸時代の長崎の地図を見ながら、長崎の町がどのようにできて行ったのかを考えてみたいと思う。岬の先端から岬の高台の町へ、と順々に辿っていき、最後に「岬の町から山懐に抱かれた町へ」の話につなげたいと思う。

1 岬の先端

岬の先端に「砦」を築くという発想は、海に突き出した高台の岬の先端に拠点を立てていくという意味で、いかにもポルトガルらしいものである。ポルトガルはアフリカからインド洋にかけて、ずっと「要塞」と「商館」をセットとして築いてきている。日本ではそれだけの人材がない代わりに、イエズス会がいる。イエズス会の教会の建物が「要塞」とか「ポルトガルの商館」の代りをしていくというプランで、最初から長崎の町が開港されたと、私はそう考えている。

例えば秀吉が「バテレン追放令」を出したときに、イエズス会の側は布教の拠点である長崎に弾薬とか武器を蓄えて、秀吉と一戦構えようとするのだが、その際「岬の教会」が軍事的な反抗の中心になってくる。先ほどスライドで奉行所の「西屋敷」が石垣で囲まれ、砦のようになって

いたことを見てきたが、そのような景観は、ヴァリニアーノも『日本巡察記』の中で述べており、長崎開港の当初「岬の教会」の時代から既にあったと思う。

岬の先端にはポルトガル人たちの活動の根拠地の中心があって、そこが貿易の拠点になっていた。江戸時代になって「出島」ができる際には、その位置を一つ「づらす」ということがあった。長崎の町の中で一番大事な場所である岬の先端に「五カ所糸割符宿老会所」を作り、貿易の拠点を幕府の息のかかった五カ所宿老たちが乗っ取ってしまい、一方ポルトガル人たちはここから追放される。追放するに際して、岬の先端のさらに先にわざわざ「出島」を築いて、そこに彼らを閉じ込めたのである。

2 内町・外町

「森崎権現」と「神宮寺」さらには「崇岳」「金比羅山」の山頂を結ぶ道は、高い岬の尾根道に当たるものだが、最初は山伏などの歩いていた《信仰の道》だったと思う。これに対して古くから「船津町」と「榎津町」を結ぶ道は、「磨屋町・酒屋町・豊後町」のラインにあり、「小川町」のところの小川を渡り、西坂さらには浦上の方に通じており、これが長崎の町ができる前から人々が通っていた《社会経済の道》で、もともと《信仰の道》とはクロスする形になっていたと想像される。

最初にできる六丁の町は岬の先端に引き続く高台の上であり、六丁町と「本博多町」の間には「一の堀」と云われる堀があって、「桜町」と「勝山町」の間に「三の堀」があり……地図にはその脇に「牢屋」が見える。「豊後町」のところにも「二の堀」があった。さらにもう一つ「小堀」と云う堀があって、その堀を埋めたので「堀町」と云う名前になったとある。こんな風にして何本か堀があって、六丁の町は全体として外の世界と隔離され、砦ようになっていたと思う。

通説では、最初六丁の町ができて、それが段々大きくなってきて「内町」となり、さらに「外町」ができたとあるが、「外町」の部分をよく見ると、町並みは《社会経済の道》に沿って横に並んでいる。一方「内町」、中でも最初にできた六丁の町の方は《信仰の道》に沿った縦並びの町である。さらに「内町」の内部を詳細に眺めると、ここにも「博多町・豊後町」と横並びの町が見つかる。しかもこれらの町は、町割の初めからあったという記録もある。

そこで「六丁の町」ができたときに、最初っから、その外側に「博多町・豊後町」等々の町があったのではないかと、私はそう思う。それが最初にできた小さい「内町・外町」である。ところで、秀吉が来たときに町を作り直して、「博多町」の辺りを根拠地にしてここに「奉行所」をおき、その周りを堀で囲むなどのことがある。このとき、「六丁の町」とその外側の町を一緒にして、それを全体として「内町」とする。そうするとその外側にさらに「外町」ができて行く。これが長崎の町の発展の仕方であったと思う。

内町の中には「金屋町」があり、いかにも金属を取り扱う人々が住んでいたと思われる。これは私の勝手な想像だが、イエズス会士たちの書いたものの中に、堺の金細工師がいて、熱心なキリシタンで、多くの困った人を助けているという記録があるが、キリシタン時代に「十字架」などをいっぱい作らなければいけないということがあって、そうした職人がこの辺りに住んでいたのではないかと想像される。証拠は何もないが、ただ名前からそんなことが考えられるのである。

「博多町」には博多の人が、「豊後町」には豊後の人が住んでいたと考えられる。「興善町」というのは末次興善という人が非常に広い地域を屋敷地として持っていたことから、その名前が付いたと云われている。それが後にいくつにも分かれて、「本興善町」「新興善町」「後興善町」等々になったとある。この末次興善という人は末次平蔵の父親で、博多の人と云われているので、博多の人たちは「博多町」から「興善町」と広い範囲にわたって住んでいたのではないかと思う。

そこで外国の船、つまりポルトガルの人たちは岬の先端の「波止場」に荷を揚げることになるのだが、博多の商人など日本側の商人たちは船津町の津を拠点としており、六丁町とその外側の町との間には「堀」があって、両者は区別されていたことになる。昨日家島彦一先生・川床陸夫先生の話で、貿易港としての「島」の場合、外来商人の居留地としての「島」と、その対岸における現地商人側の貿易拠点と云うことがあったが、同じような関係が長崎においてもあったのではないかと考える。

3 長崎の寺社

キリシタン時代になると、現在「諏訪神社」のある辺りにあった「神宮寺」という大きなお寺を焼いてしまう。立山の辺りにはいくつものお寺があった可能性があるが、これをどんどんと焼き払い、代わりにキリシタンの「教会」を建てていく。その後、江戸時代に入り「邪宗門・邪教」ということで、それが否定されるようになると、次は「正法」ということで仏教が復活してくる。そうすると、昔「教会」のあったところがまた「お寺」になってくるという歴史があるように思われる。

今でも長崎の諏訪神社、その祭礼としてのオクンチは有名だが、地図の右上、中島川が二俣に分かれる近くに「諏訪町」が見える。それゆえ諏訪神社はもともとはこの辺りにあり、「諏訪町」がその門前町ではなかったかと思う。しかし、キリシタン時代にはこの神社も焼かれてしまう。それで江戸の初期に、「丸山」という所に復活したものと本には書いてある。丸山にあったものが、次に現在の立山のところに移って行くわけである。

なぜ東国の諏訪社がここにあるのか、というと、二俣に分かれた中島川をさらに遡った扇状地の長崎村には長崎の地頭・長崎甚左衛門がいるのだが、彼の先祖は鎌倉武士で東国からやってきたと云われている。それが事実かどうかははっきりしないのだが、少なくともそう信じられてい

るので、正しいかどうかとは別に、その伝承との関係で「諏訪神社」がこの地に勧請されたのだと思う。

4 高麗町と中国人の雑居

次に中国人たちはどこに住んでいたのかということだが、中国人たちの住んだ「唐人町」が見つかるかと思っただけで「どこだろうか」と目を凝らしているのだが、どうも見つからない。ところで、自分の云った仮説に自分が縛られてしまうことはとても恐くて、もしかするととんでもない出鱈目ということになるかもしれないが、自分の立てた仮説に従うと、やはり「内町」の部分に外からやってきた唐人たちは住んでいたと思う。

となると、最初の頃は、最初の内町である六丁町の中に中国人たちは「雑居」していたことになる。ところで六丁町のなかにもともと「分知町」というものがあるが、中国人の「分知」というものがここに住んでいたのが「分知町」と名付けたとの記録がある。この伝承を信じない人もいるのだが、私は信じようと思っている。これは町ができる以前に既にこの地に中国人が住んでいたということで、岬の地域がアジールの場所であったことを示していると思う。

一般に中国人はチャイナタウンを作りたがる民族だといわれているが、どうも初期の長崎にはチャイナタウンはなかったようである。一方、長崎には「福濟寺」「崇福寺」「興福寺」という三福寺がある。これは中国人の地縁的な結合体である「幫」の「会館」に当たっていて、興福寺は南京幫、崇福寺は泉州幫、福濟寺は福州幫なのだそうである。日本の場合は「お寺」という形でしか会館を許可しなかったので仏教の「お寺」になったと云われている。

中国人の住んでいた「唐人町」は見つからないのだが、一方、古川町の辺りに昔は「高麗町」があったという伝承があり、伊勢町のもう一つ古い名前が「新高麗町」であると云う。「高麗町」と云う名前から、ここには高麗から来た朝鮮の人たち、秀吉が捕虜として奴隸的な形で連れてこられた人たちが、どう云う理由でかわからないがここに住んでいたと思われる。伊勢町にかかっている三つの橋のうちの一つが「高麗橋」と云うとある。どれであろうか。

つまり、高麗の人はひと所に集まって住んでいたと思うのだが、中国人は一ヶ所に集まっては住んではいなかった、日本人に混じって「雑居」していたということになる。そこで最初唐人が船で海外から長崎にやってきたとき、内町の「船宿」に入る。この「船宿」は中国人の経営する場合も多かったと思う。一方「船宿」では、例えば自分の家の娘であるとか、唐人相手の女性がいて、自分のところにまた来て欲しいという気持で、娘ぐらいやってもいいということになっていたと思う。

例えば鎖国のとき「来舶唐人」と「在宅唐人」と、船で日本にやってくる方と日本に留まる方とに唐人をはっきりと分けてくるのだが、日本人になってしまいう在宅唐人の方は、奥さんの名前

で日本名を名乗っていくことがあったとある。このことは「雑居」とはいうものの、日本人との間で結婚をどんどんしていくことがあって、またそのことが周りの人たちの間で、別におかしいことではないという世界、荒野泰典先生や村井章介先生が「倭寇の状況」と云っておられる世界があったのだと思う。

お二人の先生は、中世においては日本人と中国人・朝鮮人との間に、中間項としてのマージナルな部分が沢山あって、互いに区別が付かないような世界があったのだと云っておられるが、このような世界が江戸の初めごろまではまだ続いていたと思う。網野善彦先生もまた『日本中世の民衆像』の中で「職人としての唐人」を取り上げ、中世という社会は開放的な「開かれた社会」であったと論じておられるが、こうしたこととも関連していると思われる。

また中国の人というと、当時一般の日本人は尊敬していたのではないかと思う。そこで、立派な人で尊敬すべき人であれば、娘をやって自分もその一族に加わっていこう、また商売もうまくやっていこうということで、中国人たちを「船宿」によび寄せていたのではないかと思う。こうしたことと本日のテーマである、唐人屋敷のあり方を比べると、中国人に対する態度が非常に大きく変わっており、驚くべきことではないかと思われる。

5 岬の町から「山懐」に抱かれた町へ

元亀二年に長崎が開港となり、長崎の町割が行われた当初、港市長崎が最初の六丁の町を中心としている際は、ポルトガル人たちの占拠した岬の先端に貿易の中心があったので、先端の方が「頭」で、勝山の方が「尻」という関係になっていた。こうした関係はしばらく続き、キリシタン時代に「桜町」のところが墓地になっていて、後には牢屋になるなどのことはここから説明できると思う。

長崎の人口が増えて「外町」の方もどんどんと発展してくると、当然遊廓なんかもできていったと思うのだが、ものの本によると「今博多町・古町」の辺りには昔は遊廓があり、その他町全体にも遊廓があったとあるが、寛永十九年にはこれらのすべてが丸山町・寄合町の一ヶ所に集められてくる。また中島川に平行して、地図上の東から南にかけての山に沿って「鹿解川」という名の小川がある。いかにもここで獣を解体したとする名前の川なのだが、諏訪町に並ぶ新橋町のところに昔「かわた町³⁾」「毛皮屋町⁴⁾」があったといわれている。

ところで「山懐に抱かれた町」ということだが、「山懐」に抱かれているということは、子供がお父さんや御爺さんに抱かれて、膝の上に乗っていると仮定すると、子供の身体の大事な頭や胴体は山付きのお父さんなり御爺さんなりの懐の方にあり、手であるとか足であるとかは先っぽの方に来ることになる。手や足の先っぽのところに丸山町・寄合町の遊廓とか「唐人屋敷」ができて、江戸の終りの開国のときには「唐人屋敷」のさらに先のグラバー邸の辺り東山手・南山手に

外国の「居留地」がいっぱいできるということになる。

「頭」のある辺りかどうかというと、やや鎌倉の「若宮大路」と「鶴岡八幡」の関係に似てくる。「諏訪神社」のある辺りに「立山屋敷」という奉行所もできてくる。八百屋町には「長崎会所」もできる。先ほど述べたように「新高麗町」という高麗人の町があったが、それがなくなり、代りに伊勢神社との関係で「伊勢町」に町名が変わったりで、北の方がやや「尊い」というか価値の高い場所になり、価値の低いものが南の方に押しやられてくるという都市計画になっていくのではないかと思う。

五 唐人屋敷の成立

唐人屋敷がどのようにして成立したのか、その理由や根拠は何かということであるが、今回のシンポジウムのテーマが「港の成立と形態」ということで、貿易の制度などの問題は次回送りということなので、ここではあまり制度の問題に立ち入らずに、簡単に触れるだけで行きたいと思う。

とはいっても、制度の問題を全く触れないわけには行かない。慶長から元禄までの凡そ百年間、長崎の唐人貿易制度、中でも糸割符制度とは無関係な反物・荒物の貿易制度に関しては、次のような変化が迎れると私は考えている。

差宿制……………寛永14年～寛文 5年

総振船制……………寛文 6年～寛文11年

市法貨物商法……寛文12年～貞享元年

定高制……………貞享 2年～

特に大事なのは寛永六年の「差宿制」から「総振船制＝宿町制」への変化である。このときの貿易の仕組の変化は図1・図2のようになると思われる。

この変化により来舶唐人の世話や取引斡旋などの仕事は差宿の「私的船宿」から宿町・附町制の「公的宿町」へと替わる。これまでずっと船宿として繁栄してきた在宅唐人の特権は一部分「小宿」として復活することはあるのだが、大事なことは、制度的として、船宿の特権が否定されたことである。一方「船宿口銭」といって、船宿や小宿は仕事に応じて「口銭」を取っていたが、次の〈口銭表〉から明らかなように、船宿・小宿の取分が段々と減り、町全体で分配する方向に段々と進んで行く。

一方、図3は「唐通事」が日本における住宅唐人・来舶唐人全体の頂点に立っていることを示しているものである。先ほどの丸荷役のところでは唐通事が荷物をチェックし、ノートしている絵があったが、唐通事は荷改帳やさらには売立帳（図1参照）を作るなどして、唐人貿易全体を管

図 1

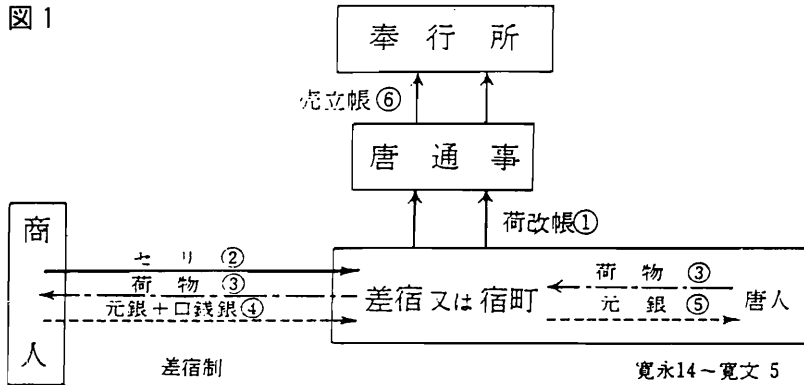
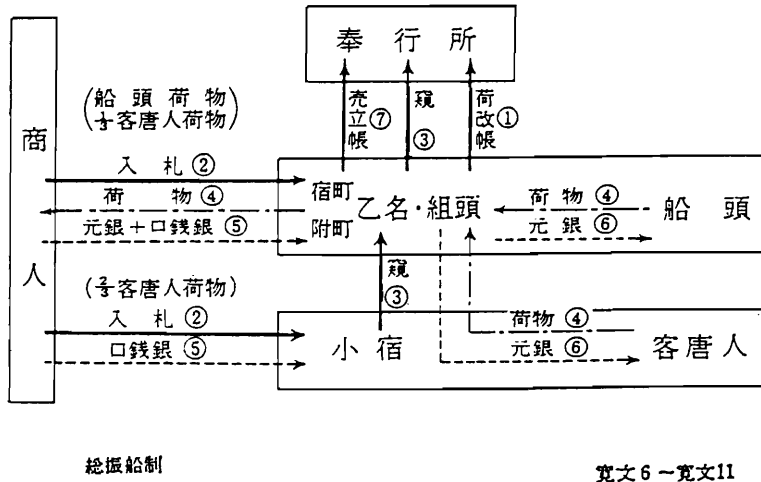


図 2



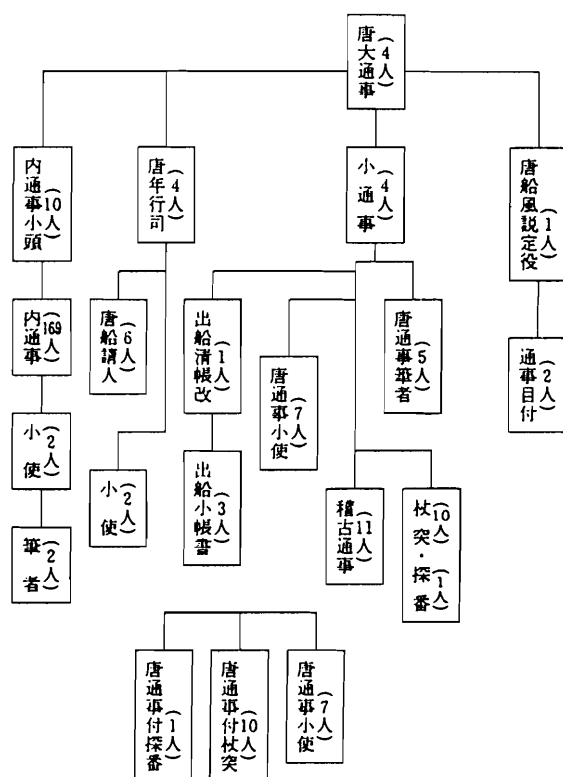
〈口銭表〉

元和元年	宿口銭を定む。反物一反につき一匁，荒物百目につき十匁。
寛永10年	口銭を半減す。反物一反につき五分，荒物百目につき五匁。
寛永18年	船宿の取分を三貫目とし，残りは惣町で配分。
明暦元年	船宿の取分を一貫五百目とし，残りは惣町で配分。

理していた。このような唐通事のあり方は，東南アジアにおけるシャバンダールと同じようなものである。中国人の現地の長老が唐通事に任命され，その人が中国人たちの貿易を一切管理する体制が，もともとの長崎の唐人貿易にはあった。

しかし，図 2 にあるように長崎の自治組織の方の町年寄や町の乙名・組頭が貿易を管理する体

図 3



制に次第に入って行き、貿易の利益をいかにして町全体に均等に配分するかという方向になって行くのである。中国人が長崎に住んでいて、海外からやって来た人たちととも現地にいる人との間で、貿易をうまくやっ行ってこうという仕組から、長崎の一つ一つの町が順ぐりに「宿町」となって、貿易から上がる利益は町全体で均等に配分する体制に変わっていくのである。

先ほど中国人は「内町」に雑居していたと述べたが、もう少し正確に云えば、「内町」には在宅唐人の「船宿」や「小宿」の存在があったわけであるが、そのことは「外町」の方には雑居できないということだったと思う。そこで「外町」の方には金は落ちてこないし、「内町」の方は特権を持った豊かな人があるという対比がずっと長く続いていくことになる。秀吉による長崎の再編の際に、「外町」は貧しい職人たちの町として成立したということが、これらの背景にあるのかもしれない。

しかし元禄期になると、これらのことが総て否定されて、来舶唐人は長崎の町のどこにおいても雑居できなくなり、人は「唐人屋敷」に、荷物は「新地藏所」にと、総て一括して隔離して收容する体制が築かれる。こうして来舶唐人が総て囲い込まれてしまうと、逆に長崎の町全体が貿

易の利益を得る、全くの平等主義の社会、均質な社会になってゆく。こうなると、「内町」は「自治都市」で町年寄が治め、「外町」は長崎代官が治めるという行政上の区別も必要なくなり、「外町・内町」の区別も意味のないものになってゆくと、こんな風に考えているわけである。

言い換えると、本来貿易港というものは、外国人を泊める「船宿」のある所は「堀」とか何かで囲まれていて、外と区別されていて、めったに外の人が入ってこれないようにしている。市の立つ日は入ってこれるけれども、普段は閉鎖的になっているのではないかと思われる。長崎の場合、そうしたことは町割の最初からできていて、秀吉が入ってきて町を作り替えるのであるが、拡大した「内町」のときにも、やはり「内町」は外とはっきりと区別されていたと思うのである。

しかし元禄期になって、長崎の町が総て順ぐりに「宿町」となり、町全体が貿易の利益に与るようになると、外町と内町を区別する必要がなくなってくる。そうすると逆に「唐人屋敷」を作って、唐人を囲ってくるのだと思う。江戸時代もその初期においては、海外と自由に貿易ができる自由な時代があったわけだが、その自由が元禄期ごろになると全くなくなってしまい、代りに平等主義の主張が強まってくる。そこで、一方には「收容所」があり、他方では平等主義を原則とする社会になっていくという意味で、振り返れば江戸時代、中でも長崎は「社会主義」の社会ではなかったかと思う。

六 むすびにかえて —— テーマ・唐人屋敷について

私は『港市論』の中で、マックス・ウェーバー (M.Weber) の云うフォンダーコ (Fondaco) の議論を引き、中人強制の制度を問題とした。外国商人がやってきた場合、彼ら外国商人には直接販売をさせないで、中人・仲介者 (Makler) が介在し、彼らを通じて販売するよう強制するというものである。これがベニスにあるドイツ商館などのフォンダーコという形態である。私はこのフォンダーコが「出島」や「唐人屋敷」にも当たるとしてきたのであるが、今ここで述べておきたいことは、これはどうも間違っていたのではなかろうかということである。

昨日陣内秀信先生からお話のあったベニスや中近東のフンドック (Funduq) というものは、バザールの近くにあり、中庭のある二階建ての建物で、一階は卸売商人の事務所と倉庫とからできていて、二階は宿泊施設になっているものである。このようなものと「出島」や「唐人屋敷」「新地蔵所」を比較すると、形態の上からも全く別物だと思う。日本側でこのフンドックに対応し、倉庫業や宿泊業を行うものは、むしろ「船宿」ということになる。

日本の「船宿」の場合は、先ほど問題とした「丸荷役」という荷物の陸揚げから倉庫業さらには宿泊業を営んでいるものであるが、町の中にある小さい一つ一つの家が個別的に倉庫業や宿泊

業さらには委託販売業を行うという形態である。私がかつて「出島」をウェーバーの云うフォンダーコに対応すると考えてきたことは間違っていたと思うのだが、そもそもドイツ人であるウェーバー自身の物の見方にも反省すべき点があるのではないかと思う。

ウェーバーの物の見方の基礎となったドイツ・ハンザの場合、海外のドイツ商館(Factory)では現地にいるドイツ商人が直接販売もし、買い付けも行っていたと思う。これに対しイスラムの世界では、現地の卸売業者が介在することになっており、外来商人たちはキャラバンサライであるとかフンドックを通じて、現地の卸売商人に売買を委託し、現地商人の手から現地の人々の手へと物資が流通する仕組みになっており、イスラムの世界の貿易の仕組みは平和的なものだったと思うのである。

これに対して、ヨーロッパにおける商館・ファクトリーというものは、ハンザ同盟の場合もそうだが、昨日の高橋均先生のお話にあったとおり、「要塞」と一体となっており、もともと現地を支配するという面を持っていたと思うのである。平和的な貿易の仕組みを持っていたという点では、日本はむしろイスラムの世界と近く、軍事的な色彩の強いヨーロッパの商館・ファクトリーは、世界史的に見て特異な存在だと思われる。

[スライドおよび図の出典]

略号

「出島図」長崎市出島史跡整備審議会編 中央公論美術出版……………D

「南方渡海古文献図録」大阪府立図書館 臨川書店……………N

スライド

番号	名称	所蔵	出典
1	「長崎之図」	神戸市立博物館蔵	D56 p.46
2	「唐船絵巻」廣南船	長崎県立図書館蔵	N24
3	「唐船絵巻」暹羅船	長崎県立図書館蔵	N23
4	「長崎名勝図絵」	長崎市立博物館蔵	N48
5	川原慶賀「蘭館絵巻」蘭船碇泊の図	〃	D222 p.222
6	円山応挙「長崎港之図」	長崎県立美術博物館蔵	D10 p.13
7	「幕府長崎海軍伝習所の図」	同和病院蔵	D93 p.82
8	「長崎鳥瞰屏風」部分	神戸市立博物館蔵	D2 p.6
9	「長崎港俯瞰図」	長崎市立博物館蔵	D19 p.21
10	伝渡辺秀石筆「唐蘭館絵巻」 小学館「探訪大航海時代の日本 5 日本から見た異国」	神戸市立南蛮美術館蔵	p.18
11	「崎陽唐人屋敷図形」	京都大学付属図書館蔵	N46
12	『幕府時代の長崎』付録		

図1 拙稿「鎖国後長崎唐人貿易制度について」『法政史学』第19号 1967年

図2 同上

図3 任鴻章『近世日本と日中貿易 東アジアの中の日本歴史4』六興出版1988年194頁

[註]

- 1) 安野真幸『港市論 — 平戸・長崎・横瀬浦 —』日本エディタースクール出版部 1992年
- 2) 平凡社『大百科事典』「唐人屋敷」の項目
- 3) 藤原有和「長崎におけるキリシタン弾圧と被差別部落」『法制史研究40』1990年
- 4) アビラ・ヒロン『日本王国記』大航海時代叢書Ⅺ岩波書店 1965年 p.418
- 5) 唐人たちは「内町」に住んでいたとしましたが、これはまちがいで、近世初期において唐人たちは、西中町や古川町を中心に内町・外町の区別なく雑居していました [中村質「近世の

日本華僑」(『外来文化と九州』1973年 平凡社所収) 参照]。当時唐船貿易は糸割符の対象外でもあり、唐人たちは住居・職業・結婚等の点で日本人との区別はなく、自由であったこととなります。

The Chinese Residences in Nagasaki

ANNO, Masaki

The theme of this symposium is “the existence and form of ports,” and it will not discuss “the contrivance and function of ports.” This theme will be covered at the next symposium. For now, we will not touch upon the historical reports, which I have prepared, on the problem of the “Chinese residences” in Nagasaki in the light of import and export business. Rather, after explaining various problems of the port in Nagasaki using slides, we will discuss the city plans of Nagasaki when it was built and after. Through this discussion we will examine the importance of the Chinese residences from the time Nagasaki Port opened.

Generally speaking, there are several sets of circumstances under which foreign nationals arrive in overseas ports. Some foreigners spend only a short period of time in the ports until their ship sets sail for another port of call. Others stay in a port for a longer period of time waiting for the next ship that is heading to their country, and still others decide to settle down in a port and bring their family from their home country or marry local women. When settling down in these ways, some may keep their national identity, while others may lose theirs and adapt themselves to a new situation.

Thus there are many different cases among foreigners living in a foreign city depending on how long they are planning to stay. Although they may be staying for longer or shorter periods of time, it is natural for foreigners to shape their own society in an overseas port and to create a foreign settlement containing people in such a variety of situations. We can think of two situations describing how these foreigners live: one is “living as a group” in one place such as Jewish quarters used to be seen in Europe, and Chinatowns seen around the world at present, and the other is “living together” among the local people.

In Nagasaki city, for example, when the port opened there was a fort-like Portuguese trading center at the tip of the cape which was rather hilly. Six town blocks were then constructed next to the center where the Portuguese lived together with the local people. On the other hand, merchants from all over Japan seemed to stay in the town which surrounded the six town blocks. In the early 17th century, Chinese also stayed with the local people in the “Inner town” in Nagasaki but they could

not stay in the "Outer town." This contrast between "Inner town" and "Outer town" is an important point to consider when we examine the trading port of Nagasaki.

Later a decree was issued to prohibit foreigners from living together with other nationals and the "Chinese residences" were built in the Genroku era. On old maps of Nagasaki "Dejima" and the Chinese residences are seen running along the outskirts of the town and are shut away by the sea, fences and walls; they were used to keep the Dutch and Chinese cut off from the Japanese. Some Dutch living in Dejima described it as "no better than a jail" and Chinese living in the Chinese residences felt the same way about their quarters. They were prohibited from marrying and settling down in Nagasaki and were only allowed to stay in the town for short periods of time.

At present, however, there is a Chinatown in Nagasaki and the Chinese "live as a group." After Japan opened its doors to foreigners in the last days of the Tokugawa Shogunate and the Chinese residences were broken, the Chinatown was voluntarily built at the site of the Chinese residences, showing how artificial and unnatural the Chinese residences system was. In short, Dejima and the Chinese residences were artificial institutions instead of real foreign settlements and were used by the state in an attempt to deal with the foreign nationals living in the city. Their existence was opposed to the natural way of life in overseas trading ports.

The existence of the Chinese residences in the Genroku era can be seen as part of the completion of bureaucratic control over the overseas trading by the authority when actual execution of power was often delegated to ordinary people of Nagasaki who acted as local bureaucrats. The Chinese who came to Japan were prohibited from living in the town. The system which forced them to live in the Chinese residences meant that every member of Nagasaki could profit from trading, having an institution of segregation on one hand, and concrete egalitarianism in society on the other. Under this situation, it can be said that Nagasaki in the day of Tokugawa Shogunate has been, in a sense, a "socialist" society.